

# 自集団に対する屈辱を受けた際の行動を調整する個人差変数の検討

今川 裕太

私たちは、自身の所属する集団の成員が不当に侮辱され、貶められたりするのを目撃すると、それをあたかも自分自身が直接経験したかのように強い不快感を覚える。この現象は「集団間代理屈辱」(intergroup vicarious humiliation)と呼ばれ、これまで国際政治やテロをはじめとする様々な集団間葛藤の文脈において、その重要性が指摘されてきた。近年の実証研究では、屈辱感が怒りおよび無力感に関連し、屈辱が怒りと評価される場合には相手への攻撃や復讐といった接近行動を喚起し、一方で無力感と評価される場合には相手との関わりを避けるという回避行動が生じることが明らかになっている。しかし、これらの認知的評価や行動に影響を及ぼす心理的要因については十分に解明されていない。そこで本研究は、集団間代理屈辱に対する行動傾向を調整する個人差変数として、システム正当化(既存の社会構造やシステムを支持・正当化する傾向)および集合的ナルシズム(自集団の卓越性が他者から十分に認識されていないという信念)に注目し、以下の2つの仮説を検証した。

仮説1「システム正当化は怒りの低減を介して接近行動を抑制する。」

仮説2「集合的ナルシズムは怒りの増加を介して接近行動を促進する。」

本研究は、大阪大学の学生 125 名を対象にオンライン実験を実施した。一般システム正当化傾向を測定するために日本語版一般システム正当化尺度(JG-SJS; 村山他, 2023)を、学歴システム正当化傾向を測定するために学歴意識尺度(池上, 2004)を用いた。また、集合的ナルシズムの測定には、Collective Narcissism Scale(Golec de Zavala et al., 2009)を、Golec de Zavala 氏の許諾を得て日本語訳したものを使用した。参加者を実験群と統制群にランダムに割り当て、実験群には、「大阪大学の学生が就職活動中に東京大学の学生に屈辱を受けた」という架空のシナリオを呈示し、統制群には「東京大学の学生とニュートラルなやり取りをした」というシナリオを呈示した。最後に、参加者にシナリオを読んで覚えた感情(屈辱、怒り、恥、罪悪感、嬉しさ、恐怖、無力感)および取りたいと思う行動(接近行動、回避行動)について回答を求めた。

データは構造方程式モデリング(SEM)を用いて分析した。結果、怒りは代理屈辱と接近行動を有意に媒介していた。また、仮説1は一般および学歴システム正当化のいずれについても支持されなかったが、仮説2は支持された。この結果は、屈辱体験に伴う敵意の認識が、システム正当化による怒りの抑制効果を相殺する可能性を示唆している。対して、集合的ナルシズムの高い人は屈辱を自集団のイメージへの脅威と解釈し、それが怒りを増幅し、接近行動を促進した可能性が示唆された。さらに、探索的分析から、無力感が代理屈辱と回避行動を媒介しないこと、そしてシステム正当化信念および集合的ナルシズムのいずれもこの経路に影響を与えないことが確認された。これらの結果は、屈辱体験における社会的文脈や集団間の地位関係が、集団単位の屈辱に基づく回避行動の形成において重要であることを示唆している。(社会心理学)